

製品名: APLP-1 ウサギポリクローナル抗体**カタログ番号: APRab07013**

研究使用のみ

概要

説明	ウサギポリクローナル抗体
宿主	うさぎ
応用	WB,IHC,ICC/IF,ELISA
反応性	ヒト、マウス
標識	非共役
修飾	未修正
アイソタイプ	IgG
クローン性	ポリクローナル
形態	液体
濃度	1mg/ml
保存	アリコートし、-20°Cで保存してください（12ヶ月有効）。凍結/融解サイクルを避けてください。
輸送	氷袋
バッファー	50% グリセロール、0.5% 保護タンパク質、0.02% 新タイプ防腐剤 N を含む PBS 液。
精製	アフィニティー精製

応用

希釈倍率	WB 1:500-1:2000,IHC 1:100-1:300,ICC/IF 1:50-1:200,ELISA 1:5000-1:20000
分子量	72kDa

抗原情報

遺伝子名	APLP1
別名	APLP1; Amyloid-like protein 1; APLP; APLP-1
遺伝子 ID	333.0
SwissProt ID	P51693
免疫原	APLP-1 由来の合成ペプチド。アミノ酸範囲: 360-440

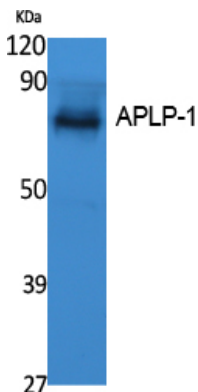
背景

この遺伝子は、高度に保存されたアミロイド前駆体タンパク質遺伝子ファミリーのメンバーをコードしています。コードされているタンパク質は膜結合糖タンパク質であり、アミロイド β A4 前駆体タンパク質の切断と同様にセクレターゼによって切断されます。こ

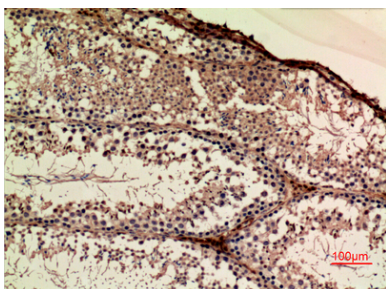
の切断により、転写活性化因子として作用する可能性のある細胞内細胞質断片が遊離します。コードされているタンパク質は、皮質発達におけるシナプス成熟にも関与している可能性があります。異なるアイソフォームをコードする選択的スプライシング転写バリエーションが報告されています。[RefSeq 提供、2008年7月]、ドメイン：多くのチロシンリン酸化タンパク質に見られる NPXY 配列モチーフは、PID ドメインの特異的結合に必要です。しかし、NPXY モチーフの N 末端または C 末端のいずれかのアミノ酸が、完全な相互作用に必要となることがよくあります。NPXY 部位は、クラスリンを介したエンドサイトーシスにも関与しています。機能：シナプス後機能に関与している可能性があります。C 末端 γ セクレターゼ処理フラグメント ALID1 は、APBB1 (Fe65) 結合を介して転写活性化を活性化します (類似性による)。C 末端結合を介して JIP シグナル伝達に結合します。細胞内 G タンパク質シグナル伝達経路と相互作用する可能性があります。ヘパリンやコラーゲン I などの細胞外マトリックス成分への結合を介して神経突起伸展を制御できます。機能： γ -CTF ペプチド C30 は、ニューロンのアポトーシスを強力に促進します。その他：細胞外ドメインで亜鉛と銅に結合します。亜鉛結合はヘパリン結合を増加させます。銅結合による Cu (2+) 還元活性はありません。PTM：N-および O-グリコシル化。PTM：ニューロンのアポトーシス中にカスパーゼによってタンパク質分解的に切断されます。試験管内において、カスパーゼ 3 によって Asp-620 で切断される。類似性：APP ファミリーに属する。細胞内局在：ゴルジ体において C 末端側で処理される。サブユニット：C 末端を介して、APBB および APBA ファミリーのメンバー、MAPK8IP1、Dab1 など、いくつかの細胞質タンパク質の PID ドメインに結合する (類似性による)。Dab1 に結合すると、そのセリンリン酸化が阻害される (類似性による)。CPEB1 と相互作用する。組織特異性：大脳皮質で発現し、シナプス後密度 (PSD) に局在する。

研究分野

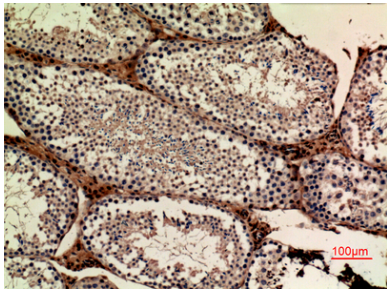
画像データ



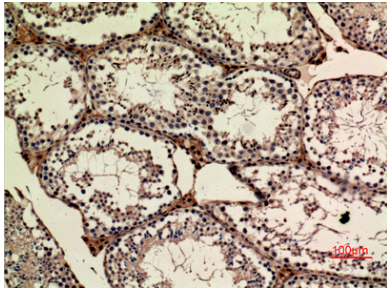
APLP-1 ポリクローナル抗体を用いた K562 細胞抽出物のウェスタンブロット分析。二次抗体は 1:20000 に希釈された。



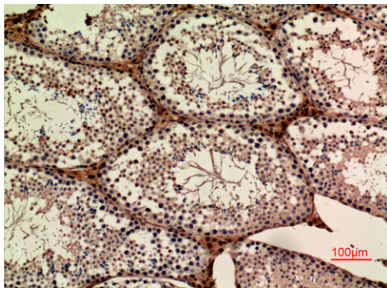
パラフィン包埋マウス卵巣の免疫組織化学分析、抗体は 1:100 に希釈された



パラフィン包埋マウス卵巣の免疫組織化学分析、抗体は 1:100 に希釈された



パラフィン包埋マウス卵巣の免疫組織化学分析、抗体は 1:100 に希釈された



パラフィン包埋マウス卵巣の免疫組織化学分析、抗体は 1:100 に希釈された